

第1回三条市鍛冶人材育成拠点構想推進事業検討会 議事録

- 1 開催日時 令和7年5月27日 午後6時00分～午後7時30分
- 2 場 所 三条鍛冶道場研修室
- 3 出席者 [委員]
越後三条鍛冶集団 水野 克彦
越後三条鍛冶集団 近藤 孝彦
協同組合三条工業会 五十嵐 孫六
協同組合三条工業会 山村 興司
三条金物卸商協同組合 山谷 武範
三 条 市 立 大 学 今井 智之

[オブザーバー]
三条鍛冶道場 事務局長 池野 泰文

[事務局]
三条市経済部商工課 課 長 米持 克広
課長補佐 坂上 和也
係 長 榎本 孝仁
主 任 中野 博隆
主 事 恩田 夏樹
- 4 傍聴者 なし
- 5 報道機関 新潟日報社
- 6 配付資料 ・資料1 三条市鍛冶人材育成拠点構想推進事業検討会について
・資料2 検討スケジュール
・資料3 カリキュラムの骨子

7 内 容

(商工課 坂上)

ただ今より、第1回鍛冶人材育成拠点構想推進事業検討会を開催します。
まず始めに、経済部商工課長の米持から御挨拶を申し上げます。

(商工課 米持)

この度、新設された鍛冶人材育成拠点構想推進事業検討会ですが、御参加くださ
いまして誠にありがとうございます。

鍛冶の世界に限ったことではありませんが、人材の課題はこの時代、どこの分野
でも解決すべき課題だと位置付けられています。その中でも、鍛冶人材の育成には
以前から取り組んできているところです。具体的には、鍛冶職人になりたい方を雇

い入れるための人材育成にかかる人件費の補助などに、これまで取り組んできたわけですが、その中で各事業所にもかなりの負担があるとも聞いています。その部分をより安定的に進めるために、鍛冶職人としての基本的な技術や知識など、人材育成のイニシャル部分を共同化することで、そのリスクを下げられないかということを考えて、今回、鍛冶人材育成拠点構想をスタートさせています。具体的には、この鍛冶道場を拠点として、鍛冶職人の基礎を培う学校のようなものを作りたいということです。鍛冶道場は、人材育成も施設の目的として位置付けられていますが、まさにそれを今後実装していきたいというところではあります。

この検討会では、主に育成にかかるカリキュラム、あるいはそのカリキュラムを施していくための学校の機能や運営体制につきまして、市でたたき台をお示ししますので、それに対して各専門分野の皆様から御意見をいただきたいと考えています。皆様から様々な御意見をいただいて、この拠点構想をより良いものにできればと考えていますので、ぜひ御協力のほどよろしく申し上げます。

(商工課 坂上)

(出席委員、オブザーバー、事務局職員の紹介)

それでは、次第に従いまして会議を進めます。

議事(1) 三条市鍛冶人材育成拠点構想推進事業検討会について、商工課の中野から説明をお願いします。

(商工課 中野)

お配りしています資料No. 1「三条市鍛冶人材育成拠点構想推進事業検討会について」に関して説明させていただきます。委員の就任の際にも皆様へ概要について説明させていただいており、今ほど課長からも本構想の趣旨、方向性について話をさせていただきましたので、改めてポイントを絞って説明させていただきたいと思っております。

まず、1「課題意識」について、地域のアイデンティティである金属加工技術を効果的に情報発信していくために、それらのルーツとなっている10品目の伝統工芸品を一貫生産できる高度で多様な技術とそれを有している鍛冶人材を安定的に育成していくことが必要であるものの、一方で、育成にかかる事業者の負担が大きいということが課題意識としてあります。

そして、2「設置目的」に繋がってきますが、冒頭、課長からも申し上げたとおり、育成にかかる費用面のコスト、人に教えるという労力に対するコスト、あるいは就職におけるミスマッチという離職のリスクなど、そのような部分が事業者にとっていただいている負担が非常に大きいところだと思っております。また、高度で多様な技術と現代的という部分では、例えば、原価計算など経営的なセンスを兼ね備えた現代的な鍛冶人材を育成していくことも必要だと思っております。

この間も約20年ほどですが、市では鍛冶人材育成の事業に取り組んでおり、総括すると、半分くらいの方が事業所に就職あるいは独立されていて、一方で、半分くらいの方が別の道に進まれたところになっています。それが率として多いか少ないかについては色々評価の部分はあると思いますが、やはりこの間、事業者の負担になっている金銭的な部分や、「どのように人材を指導していくのか」をそれぞれの事業所でやっていただいていたところではあります。元々、鍛冶道場の機能として指導者の育成や人材育成を謳ってはいますが、令和8年度を目標に、人材育成にかかる知識面の学習や技術面の訓練を共同化した体系的なカリキュラム、そして、それを効果的に実践するための指導体制や育成拠点の機能について、今後改めて鍛冶道場に付

与していきたいと思っています。その部分について、専門的な内容で行政では分からないところもあるため、皆様から様々な御意見を頂戴しながら、例えば、カリキュラムの妥当性や実現可能性、その他必要な事項について検討させていただきたいと思っています。

3「検討事項」に記載させていただいていますが、今ほど申し上げたとおり、体系的なカリキュラムや育成拠点機能、運営体制、その他必要な事項についても様々な御意見を頂戴をしたいと思っています。

4「三条市鍛冶人材育成拠点構想推進事業について」に関して、参考に説明させていただきます。この事業については、体系的なカリキュラム作成や育成拠点機能、運営体制の整備をいきなり本格的に運用するのは難しいと思っているので、今年度については、三条鍛冶道場において試行的に運用していきたいと思っています。試行的な運用については、現在事業所に所属をされている新入、あるいは若手従業員を受講者として、暫定的なカリキュラムを基に指導しながらブラッシュアップをしていくような形で並行的に行っていきたいと想定しています。その状況についても、この検討会で共有しながら、また、カリキュラムへの反映について並行的に進めていきたいと思っています。

5「組織」について、この検討会には鍛冶製品に関係が深い団体、あるいは事業所から計6名を選出させていただいています。事務局は三条市が務めます。オブザーバーには三条鍛冶道場の指定管理者として、また、今回の拠点構想推進事業の受託者として池野事務局長に参加いただいているところです。先ほど申し上げた委託事業である拠点構想推進事業について、ゆくゆくは鍛冶道場の機能として想定しているため、現指定管理者が担うべきだと考えています。一方で、三条鍛冶道場は市の公共施設ですから、検討会の議論の結果については、事務局として市がまとめていきたいと思っています。任期については、記載のとおり今年度3月31日までを予定をしています。

6「検討会スケジュール」について、第1回～第3回検討会については資料のとおりです。第4回については、来年2月下旬を予定しております。

お手元の資料No. 2で説明させていただきますが、先進地視察を予定しています。高知県に鍛冶屋創成塾という先進的に鍛冶人材の育成にかかる取組をしている地区があり、10月以降に視察したいと予定しています。第3回検討会までで、カリキュラムや体制についてはおおむね骨格が決まっている想定ですが、実際に指導していくにあたり、施設内での細かな運用方法などを視察してくることになるかと思いません。実際にどのような運営しているのかを視察をした上で、視察結果を第4回検討会で皆様に説明し、それも踏まえて検討していきたいと思っています。また、2月は最終回になるので本検討会を総括させていただき、令和8年度の方向性、拠点構想の状況について皆様にお示ししたいと思っています。

もう1点、検討スケジュールについて、資料No. 2を御覧ください。市役所内部のスケジュールにはなりますが、鍛冶道場の機能として育成機能を付与することになるため、条例の改正を予定しています。9月下旬には条例改正案をまとめることが必要になり、9月中旬からは次年度予算の要求が始まるので、第3回目検討会で予算要求、あるいは条例改正に必要な方向性について、皆様と議論をしていきたいと思っています。条例改正については、12月議会で条例改正案を議会に諮ることを予定しており、3月には次年度予算が決まるという内部のスケジュールも踏まえて、この検討会も進めていきたいと思っています。

資料No. 1、No. 2の説明については以上です。

(商工課 坂上)

事務局中野からの説明について、御質問等ありましたらお願いします。

(山谷委員)

これまでの取組で半分くらいの定着があったという話ですが、人数は何人くらいなのですか。

(商工課 中野)

総数が29名で、そのうち独立、あるいは事業所に就職が14名です。

(山谷委員)

何が良くて何がダメだったのかという検証があれば、今回のカリキュラムで押さえるべき部分に分かるので、検証できるならしたほうが良いと思います。

(山村委員)

総数29名は、何年間の実績なのですか。

(商工課 中野)

約15年間です。

(商工課 米持)

山谷委員から話がありましたが、辞めた理由は大事だと思っていて、カリキュラムを作る中では、それをどうやって見極めるのかというところも1つの議論のポイントになると思っています。お示しできる範囲で、定着できなかった事情をお示しできればと考えていますので、よろしくをお願いします。

(山村委員)

鍛冶人材と言うと、伝統的技術やその価値の話になるかと思いますが、全部手で叩いて形を作っているということではなく、間違いなくそこには機械を使ったり道具を使ったりするものがあると思います。なので、鍛冶人材の定義をどこまで広げるかによって、カリキュラムの内容もおそらく変わってくると思うのですが、現状、鍛冶人材の定義についてはどのように考えていますか。

(商工課 米持)

資料No. 1に書かせていただいています。現状では10品目の伝統工芸品を一貫生産できることを視野に、それに必要な基礎というところを念頭に置いています。一方で、時代に合ったものづくりの方法も多くあると思っています。その意味で、どこまでそこにこだわるのか、そもそもこだわった結果、それは実現可能なのかという部分の問題もあります。ひとまず今の段階では、ここに書いてあるとおり、10品目の伝統工芸品を生産できる幅広い技術を有する人材を育成する、その基礎を培うというような位置付けであります。繰り返しになりますが、実現可能性も念頭に置いているので、そこについても御意見をいただければありがたいです。

(山谷委員)

10品目の伝統工芸品を再確認させてください。

(鍛冶道場 池野)

庖丁、切出小刀、鉋(かんな)、鑿(のみ)、鉋(なた)、鉋(まさかり)、鎌(かま)、木鋏(きばさみ)、ヤットコ、和釘です。

(商工課 坂上)

議事(1)について、その他よろしいでしょうか。

それでは議事(2)について、再度中野から説明します。

(商工課 中野)

資料No. 3「カリキュラムの骨子」について説明させていただきます。これをたたき台に、意見交換させていただきたいと思っています。

資料の左側には技術面に関すること、知識面に関すること、経営面に関することということで、テーマをそれぞれ分けさせていただいています。大きく3つに分類させていただきましたが、1つ目が技術面に関することです。鍛冶人材の育成に最も必要な要素の1つだと思っています。右側には卒業時の人物像ということで、卒業時に基礎的な技術を習得をしているということを目指して、逆算的に、その基礎的な技術はどのようなものがどこまで必要なのか、1年次にはこういうことをして、2年次にはこういうことをするといったところで進めていきたいと思っています。

1年次の習得目標については、鋼付けから鍛冶製品の完成に必要な一連の製造技術を習得するとしています。2年次の習得目標については、鍛冶製品の様々な製造方法や技術の基礎を学んでいくとしています。

学習内容については、1年次は前期、後期に分けていますが、前期については和釘づくりやペーパーナイフづくり、包丁研ぎの技術を学ぶ、後期については切出小刀や小型包丁の製造の技術を習得するとしています。2年次については1年次の基礎を踏まえて、製品ごとの異なる製造方法や技術を学ぶ、また、同じ製品であっても事業所ごとで異なる製造技術のポイントがあると思うので、そのようなことを学ぶということを想定しています。

活動拠点については、1年次は三条鍛冶道場を活動拠点としたいと考えています。2年次は事業所ごとで異なる鍛冶技術のポイントを学ぶこととなりますので、鍛冶道場に加えて協力事業所を募って、各事業所で製造についてポイントを学ぶことをしていきたいと思っています。

議論のテーマという欄を設けましたが、習得目標、あるいはそれを達成するための学習内容などが適正かどうかについて、卒業時の人物像から逆算して1年次、2年次ということで議論させていただきたいと思っています。

知識面、あるいは経営面に関することについても同様に、まず卒業時にこのレベルまでが必要だということを皆様と協議させていただいた上で、それを逆算して1年次、2年次、そして目標、あるいは学習内容などについてお話をしていきたいと思っています。

御覧いただいているとおり、資料はカリキュラムの骨子でして、若干粗い状況です。意見交換の流れについては申し上げますが、卒業時の人物像で各項目ごとに、例えば、技術面であれば卒業までにどのような技術をどの水準まで習得をさせるのかというところで、その水準を習得させるために必要な学習内容について意見交換をさせていただきたいと思います。また、その必要な技術についてどのくらいの期間で習得が可能なのかについて、各項目ごとに具体的に意見交換させていただきたいと思っています。

これから意見交換させていただきたいと思いますが、今時点で何か御質問等ござ

いますでしょうか。

(水野委員)

今回、学校のような形ということでしたが、生徒は毎日通うイメージですか。

(商工課 中野)

卒業時に求められる姿、技術であればこういう技術を習得していなければならず、それを教えるため、習得するためにはこういう学習内容が必要で、それにはこのくらいの期間が必要で、例えば、1日5時間を毎日来る期間でないと達成できないものなのか、ものによってはある程度の期間、その週に何回かで済むものなのか、それを逆算的に検討していただきたいと思います。

(商工課 米持)

補足させていただきます。中野が逆算と申し上げましたが、基本的に、そもそも卒業時になってもらいたい人物像というのは、先ほど山村委員からも話がありましたが、どのようなところを目指すのかによって変わってくると思っています。そのため、求める人物像から逆算して検討しつつも、実際それが実現可能なかどうかというところから振り返って、もう1回求める人物像に戻っていくというようなやり取りが何度か出てくると思っています。

そうした時に、仮置きで1年次、2年次という形で考えておりますが、そもそも求める人物像を育成しきるためには、知識も技術指導も含めて具体的に何時間の指導が必要なのが、まず出てくるのだと思っています。そうすると、延べ時数のようなものが出てくるのではないかと想定してるわけですが、一方で、それに対してどれだけコストと労力を割いて指導体制を整えられるのかということは、今の現実的な課題なども考慮して、本当にそのような指導をどれくらいの密度でできるのかというところを、今後私どもで揉ませていただければと思っています。その意味で、仮置きで1年次、2年次としていますが、仮に求める人物像がこの程度であれば1年だけで終わるかもしれないということにもなるかもしれませんが、おそらくそこまで手厚く人をかけて、密度高く指導するということが、なかなか現実的ではないと思いますので、まずは2年をイメージしてるというようなところ です。

先ほど説明しましたとおり、あくまでもカリキュラムの骨子ではありますが、この骨子に致命的にこの項目が抜けてる、反対にこれは蛇足ではないかなど、そのような忌憚のない御意見をいただければと思います。その御意見を踏まえて、我々のほうでまたそれを肉付けして、次回以降にお示しするようなことを考えていますので、御意見等あればお聞かせいただければと思うのですが、いかがでしょうか。

(山村委員)

求める人物像の話が出たので、少しややこしい部分ではあると思うのですが、技術面から1つのその方向性で、今、私は市立大学で「刃物製造技術論」を教えています、その中で一応方向性がないとダメなので、刃物の定義、それは刃物に求められることは何かという定義を考えていました。

基本的には「よく切れること」。例えば、よく切れるというのは使う人にとって切りやすいことも含まれると思います。その次に、「切った面が綺麗なこと」。切った面が綺麗だからよく切れるということに繋がるかもしれません。あとは、「長く切れること」。そして、刃物ですので「商品として美しいこと」。大別するとこの4つがあるのではないかと私は思います。

私が教えている「刃物製造技術論」では、この4つを実現するためにはどんな技能が、どのような技術が必要であるかという視点で説明をさせていただいています。よく切れるものは、それが適切な重心を持っているか持っていないかによって使い勝手が良い悪いなどがあるのですが、例えば、角度が鋭利などの話にもなってきます。切った面が綺麗になるということは、例えば、刃が平らでなければ綺麗になりませんから、研磨技術というものが出てくると思います。長く切れることというと、刃が丸くなりにくい、刃が壊れない、欠けないなどの話が出てくるので、組織学の話になってくると思います。商品として美しいとなってくると、資料には記載されていませんが、意匠性やデザインというものも必ず出てくるはずだと思います。

刃物づくりとして私が考えた定義はこの4つだったのですが、求める人物像では、この4つをカバーできるような技能を習得できているといいのではないかと思います。デザインについては現状では記載されていませんので、あるといいのではないかと思います。

(商工課 米持)

山村委員から、4つの視点から見て、カリキュラムの骨子にはデザイン性・審美性のことが触れられてないので触れたらどうかと御意見がありました。実際に現場で鍛冶刃物を作っている観点から、今ほどの御意見に対して皆様から御意見ありますでしょうか。

(水野委員)

実際どんなことをやっているかを先に把握するために、視察を早めてもいいと思います。

(五十嵐委員)

教える範囲が広がってくると、それを教える指導者がその分必要なわけですので、体制が前に進むのかという心配、懸念も少しあります。

(商工課 米持)

指導者が確保できないなど、現実的な問題に対しても対応していかないといけないと思っています。そのような意味で、理想を追いつつ、その理想を実現するための体制も考慮して、それをトータルで見た時にどれくらい育成期間が必要なのかということが出てくると考えています。

あくまでも今回、当然2年では鍛冶職人にはなれないので、10品目の多様な製品を作れる技術に共通するような基礎的な技術をまず身に付けて、ある程度の鍛冶に対する向き不向きの適性も確認できれば、事業所に勤めた後の離職リスクが大きく減るとことが問題意識ですので、この学校だけで一人前の鍛冶職人を育成するところまでは考えていません。

ここまですきたら良いという共通部分と、実際の指導者の体制等を考えて、この期間では難しいからその手前までにするという判断や、逆にこれなら多くの手があるからもう一步進んでもいいのではないかなど、そういう形で決まってくると思っています。

(山谷委員)

この人材育成拠点構想では、独立よりも基本的には各事業所に就職してもらうための初歩的なこと学んでもらうようなイメージですか。

(商工課 中野)

独立を否定するわけではないですが、現実的にはそうなるかと思います。

(三条鍛冶道場 池野)

視察先の候補に挙がって結局行かないことになった別分野で、家具の学校があって、そこは2年間勉強するとその家具学校を運営している家具メーカーに就職できて、もう1年勉強すると独立する道も一応用意されているようです。また、独立してもいきなり食べていけるわけではないので、はじめはこの家具メーカーの下請け仕事を出してもらって、独立を目指していくようになっているようです。生徒はお金を払って、学校に通う形です。

(山村委員)

生徒がお金を払う払わないというところで言えば、身銭を切って勉強に来る場合と、お金をもらって勉強する場合とでは立ち位置が違うので、お金を払って勉強に来る人のほうが確実にやりやすいとは思いますが。お金をもらって勉強に来る人はいなくなっても仕方がない部分があるかと思うので、お金を払ってでも勉強したいという状況のほうがいいと思います。

あとは、本当に基礎からやるとなると、ネジはどっちに回すか、6ミリのネジ穴を開けるには6ミリのタップではダメなど、実際に市立大学で教えている経験からすると、そのような知識から必要になると思います。共通言語が分かるだけでも、受け入れ事業所の負担はかなり減ると思います。

(山谷委員)

図面を描ける能力も、絶対必要になってくると思います。

独立しないのであれば、経営面は必ずしも学ぶ必要はないと思います。決算書を見てどうのこうのは必要なさそうです。

(三条鍛冶道場 池野)

経営者的には、従業員が経営のことを分かっているとやりづらい部分があるのか、逆に従業員にも経営のことを多少意識してほしいのかなどの意見はありますか。

(山村委員)

経営を分かっていることは全然いいと思っていますし、勉強してきてもらえるということは、コスト意識がついてくれるのでいいとは思いますが。

(商工課 米持)

独立するのか就職するのかによって、求められるレベルが変わってくると思いますので、ひとまず私どもとしては、まずは就職を念頭に置いています。技術を継承することが大事だという最終的な目的意識があって、そこに一番効率的に辿り着くためにはそのような道かと思っています。

そうであるならば、経営面に関してはこのくらいのレベルが必要なのではないかと、このくらいのレベルで十分なのではないかというところがあると思いますので、その観点から御意見いただけるとありがたいと思います。

(山村委員)

どこかに就職して、もし継承しますとなった場合に、一人親方の事業所もありますから、その場合は分かっていたほうがいいと思います。

(今井委員)

経営面だと市立大学の講義があるので、そちらと連携して聴講生として参加してもらうことにすると、鍛冶人材の講師の負担を減らすことができるかもしれないです。市立大学には聴講生の制度があるので活用できると思います。

(山村委員)

私が思うのは、鍛冶の基礎的な技術などが、就職の際のミスマッチになってしまうこともあるかと思っています。鍛冶屋にとっても良いイメージを持って入ってきて、実際の環境に行った時に「いやこれは何か違う、私がやりたかったのはこういうものではなくて、刀を作りたかったんです」ということがミスマッチの始まりなので、実際は結構地味な作業になるものだと本来分かってないといけないとは思いますが。

(山谷委員)

図面どおりに作ることが大事なので、図面が読めないとダメです。叩く前にまずそこです。

(山村委員)

図面を見て穴の位置を決めたいのになぜか合わないという相談は実際に来ます。基準から合わせて測らないと穴の位置は決まらないというのが図面です。

基本的なところでは、まず最初に、工学基礎のようなものがないといけないかと思っています。

(商工課 米持)

そうしますと、資料に書かれているよりもさらに共通的な基礎の項目は、鋼付けや鍛造などよりも前段階に、共通言語を用いるための基礎の基礎のようなところがあって、その中でもこれとこれは外せないというような項目があるかと思っています。その部分が不足してるのではないかという意見でよろしいでしょうか。

(五十嵐委員)

例えば、刃物であれば熱を加えると膨張しますが、冷めたときに元に戻るかと言えば戻りませんから、材料についてのそのような認識も必要なのかなと思います。

(山谷委員)

知識ですね。

(山村委員)

本当に私たち受け入れ企業側が最初に苦労するところが共通言語なので、そこはしっかりしていたほうが企業側は絶対ありがたいです。

(商工課 米持)

やはり資料に書かれていることよりも、さらにその手前の共通言語や初歩の初歩をどう習得してもらうのが大事なのではないかということがおおむねあったかと

思うのですが、鍛冶人材育成拠点構想推進事業の受託者として池野事務局長から、何かしらこの場で確認しておきたいことや、何かしらお考えのところはありますか。

(三条鍛冶道場 池野)

共通言語は工業高校などを卒業していれば知っているのではないかなと思いつつ、でも、最近の工業高校は昔の典型的な機械科のような学科は少なくなり、学ぶ機会は減っているかもしれません。中学校の技術の授業でも、男子も家庭科が必須になるなど、今の子どもは我々の世代よりも習っていることが圧倒的に少ないと思います。

(山村委員)

工業高校レベルの基準について詳しくありませんが、市立大学の中で教えていると工業高校に行っていない、普通科を卒業してきた人たちもたくさんいるので、共通言語を知らない前提で大学では話をしています。

(商工課 米持)

初歩の初歩というようなお話でしたが、体系的なカリキュラムを作るという意味で、最低限抑えておくべき標準的な基礎の基礎のようなものを抽出できて、これとこれとこれは少なくともやらなければいけない項目だというものはあるのでしょうか。

(山村委員)

加工の種類を、この加工、この加工、この加工と分けて考えていくと、その分類分けができていくのではないかと思います。歪み取りや鍛造など色々ありますが、いわゆる塑性加工というものになってきたり、作切りや切削などにもなってくると思います。

そのように分けた上で、どこが鍛冶にとって大事かということになってくると思います。

(商工課 米持)

加工方法の目線で体系化していくということでしょうか。

(山村委員)

そうです。市立大学ではそのように授業をやらせてもらっています。

(山谷委員)

私が大学時代に読んだ本の中で、一番参考になったものは金属工学の本でした。

(山村委員)

自分が大学の先生から結構言われていたのは、高校の技術の教科書を持ってきてそれで勉強してごらんと言われて開くと、確かにちゃんと書いてあるのだなと思いました。伸びや歪みなど、全部書いてあるという経験がありました。

(山谷委員)

基礎知識のレベルとして、工業高校の教科書を理解できているというところでもいいかもしれません。

(商工課 米持)

基礎の基礎、初歩の初歩というものは、まさに高校の技術の教科書があるではないかという世界なのですね。

(山谷委員)

ただ、おそらく工業高校を卒業してたとしても、そこまでしっかり勉強していない可能性は高いです。

(山村委員)

技術面に関するカリキュラムもそうですが、刃物であろうがなかろうが、何かしらの製品がちゃんと出来てくるというような、カリキュラムごとに少しずつものが作れていくというようなものがあつたほうが、ものづくりに向いている向いていないが分かるのではないかと思います。例えば、灰皿など何かしらのものを、カリキュラムごとに自分で作ってきたという成果が見えていくと、ものづくりが好きか嫌いかというところが分かると思います。

(山谷委員)

基本、ものづくりが好きの人が来るという前提ですよ。

(山村委員)

そうですね。しかし、今までの補助金の事例でも、鍛冶をやりたいから来て、実際に勤めてお金もらっていても、向いていなかったということで辞めることがあるので、ミスマッチを見極めるのは大事だと思います。

(山谷委員)

ものづくりのイメージとの違いですね。

(山村委員)

基礎の基礎から踏まえてやった時に、ものを作っていく時にどういうところが必要なのか、それに対してどれくらいの期間が最低限必要なのかというように考えていくと、カリキュラムの内容であったり、それに伴う時間であったりというものができてくるのではないかと思います。

その中で、この鍛冶道場でやる学校化での「売り」が生まれてこない、ただ開いてるから希望者が来るということにはならないと思うので、こういうことが体験できて、こういうものが随時できていってというようなものがないと、たぶん希望者が来ないという話で終わってしまうと思うので、そこは何かしらそういうことができるようなカリキュラムにしたほうが良いと思います。

(五十嵐委員)

外国人でもここに入れますか。

(商工課 米持)

今のところ、特に対象に制限はないです。

(水野委員)

卒業したら雇うのか、もしくは技術を国に持って帰ってもらって商売するのかわすかね。

(山村委員)

技術を国に持って帰ってもらうことも決して悪いことではなく、私どもが高い商品を売った時に必ず聞かれるのが、研ぎはどうすればいいですかと聞かれるので、その際にこの国には誰々がいるからと言えるようになりますね。

(近藤委員)

卒業と就職はセットですか。

(商工課 中野)

絶対ではありませんが、前提とするとそこが現実的だと思っています。

(近藤委員)

そうすると、そもそも三条の事業所が人を受け入れているかという問題もありますか。

(三条鍛冶道場 池野)

基本的には、どこも人材を採用できなくて困っているので、このレベルで卒業してくれたら自分のとこで取りたいということで考えてもらえればいいかと思います。

(商工課 米持)

先ほども言いましたが、完全な人を育てようというわけではなく、事業所に入ってから成長できる余地がある人の見極めと、かつ、事業所に入ってからロスタイムなく成長に繋がっていくような意味での共通言語を持つてる人が出てくれればいいかなと思っています。

そうしますと、資料に書かれていることもさることながら、デザイン性という話もありましたが、そのようなところも必要かと思いつつも、その前段階である基礎の基礎の習得が必要で、それはもしかすると、高校の技術の教科書をしっかり学ぶことになるかもしれませんが、そのようなところからやっていく必要があるのではないか、それは技術に関すること、知識に関すること、いずれも共通しているものと思っておりますが、そのように理解させていただきました。

また御意見をいただきながら、共通の標準的なここは外せないというところを整理してくような感じになろうかと思えます。次回の検討会に至るまでに、具体的な御意見を伺うことがあるかと思えますが、御協力をお願いできればと思っています。

(商工課 坂上)

それでは議事(3)その他について、説明します。

(商工課 中野)

その他の事項としまして、第2回検討会の予定ですが、7月上旬の開催を予定しています。別途、皆様と調整させていただきたいと思えますので、よろしく願います。

(商工課 坂上)

それでは、本日事務局が御用意した内容は以上となります。委員の皆様からその他御意見などございますでしょうか。

(山谷委員)

視察は誰が行くのですか。

(商工課 中野)

拠点構想推進事業の受託者と市の職員で行くことを予定しています。

(商工課 坂上)

他にはよろしいでしょうか。

では、以上を持ちまして第1回検討会を終了させていただきます。皆様、お忙しいところお時間いただきましてありがとうございました。